宮本武蔵（五）

吉川英治文庫

昭和50年8月1日　第1刷発行
昭和59年1月20日　第22刷発行

吉川英治文庫52
宮本武蔵(五)
定価480円

著者　吉川英治
編集　株式会社 六興出版内
吉川英治文庫刊行会
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社 講談社
東京都文京区音羽2—12—21
振替東京8—3930
電話東京03(945)1111(大代表)

印刷所
製本所　凸版印刷株式会社

Printed in Japan
©吉川文子　1975
(文2)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-142052-6(1)

吉川英治文庫

52

宮本武蔵（五）

講談社

目次

風の巻（つづき）

空の巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

さしえ

矢野橋村

石井鶴三

宮本武蔵

(五)

風の巻（つづき）

菩提一刀

一

大四明峰の南嶺に高く位しているので、東塔西塔はいうまでもなく、横川、飯室の谷々も坐ながらに見える。三界のほこりや芥の大河も遠く霞の下に眺められ、叡山の法燈鳥語もまだ寒い木の芽時を――ここ無動寺の林泉は寂として、雲の去来のうえにあった。

「……与仏有因

……与仏有縁

……仏法僧縁

……常楽我常

……朝念観世音

……暮念観世音

……念々従心起
……念々不離心」

誰か？

無動寺の奥まった一間のうちから、誦すともなく唱うるともない十句観音経の声が――声というよりは自ら出る呟きのように漏れてくる。

その独り語は、いつのまにか、われを忘れたかの如く高くなり、気がつくとまた、低くなった。

墨で洗ったような大床の廻廊を白い衣を着た稚児僧が、粗末な御斎の膳を眼八分にささげ、その経音の聞える奥の杉戸の内へ持って入った。

「お客様」

稚児僧は、膳を隅へおいた。

そしてまた、

「……お客様」

膝をついて呼んだが、呼ばれた者は、後ろ向きになったまま背をかがめており、彼の入って来たのも気づかない様子なのであった。

数日前の朝――見るかげもない血まみれな姿して、剣を杖に、ここへ辿りついて来た一修行者。

といえば、もう想像がつこう。

この南嶺から東に降れば、穴太村白鳥坂に出るし、西に降ればまっすぐに修学院白河村――あ

の雲母坂や下り松の辻につながる。
「……お午餐を持ってまいりました。お客様、ここへお膳をお置きいたします」
やっと、知ったように、
「オウ」
武蔵は、背をのばし、振りかえって膳と稚児僧のすがたを見ると、
「おそれいります」
坐り直して、礼儀をした。
その膝には、白い木屑がちらかっていた。細かい木屑は、畳や縁にもこぼれている。栴檀かなにかの香木とみえ、微かににおう心地がする。
「すぐ召しあがりますか」
「はい、戴きます」
「じゃあ、お給仕申しましょう」
「憚りさまですな」
飯椀をうけて、武蔵は食べにかかる。稚児僧はその間、武蔵のうしろにキラキラ光っている小柄と彼が今、膝のうえから下ろした五寸ほどの木材をじっと見ていたが、
「お客様、なにを彫っておいでになるんですか」
「仏様です」
「阿弥陀様？」
「いいえ、観音さまを彫ろうとしているのです。けれど、鑿の心得がないので、なかなかうまく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

彫れない。この通り指ばかり彫ってしまう」

手をだして、指の傷を見せると、稚児僧はその指よりも、武蔵の袖口から見える肱の白い繃帯に眉をひそめて、

「脚や腕のお怪我は、どんなでございますか」

「……ア。その方も、お蔭でだいぶよくなりました。御住持にも、どうかお礼をいっておいてください」

「観音様をお彫りになるなら、中堂へ参りますと、誰とかいう名人の彫ったという作のよい観音様がありますよ。御飯がすんだら、それを見に行きませんか」

「それはぜひ見ておきたいが、中堂まで、道はどれほどあろうかな」

二

稚児僧は、答えていう。

「ハイ。ここから中堂までの道は、わずか十町ほどしかございません」

「そんなに近いのか」

そこで武蔵は、食事が終ると、そのお小僧に伴われて、東塔の根本中堂まで行ってみるつもりで、十幾日目で、久しぶりに大地を踏んだ。

もうすっかりよくなったつもりでも、土を踏んで歩いてみると、左の脚の刀痕がまだ傷む。腕にうけた傷痕にも、山風が滲み入るここちがする。

けれど、颯々と、鳴りゆらぐ樹々のあいだに、山桜は散って飛雪を舞わせ、空はやがて近い夏

の色を湛えかけている。武蔵は、萌え出る植物の本能のように、体のうちから外へ向って象われようとして熄まないものに、卒然と、筋肉がうずいてくるのを覚えた。

「お客様」

と、稚児僧は、その顔を見あげ――

「あなた様は、兵法の修行者でいらっしゃいましょう」

「そうだ」

「なんで観音様なんか彫っているんですか」

「……」

「お仏像を彫ることを習うよりも、その暇に、なぜ、剣の勉強をなさらないのです？」

童心の問いは時によると、肺腑を刺す。

――武蔵は、脚と腕の刀痕よりも、その言葉に、ずきんと胸の傷むような顔をした。まして、そう問うこのお小僧の年頃も十三、四。

下り松の根元で、闘いに入ろうとするや否、真っ先に斬り捨てたあの源次郎少年と――ちょうど年ばえも体の大きさも似て見える。

あの日。

幾人の傷負いと、幾人の死者を作ったろうか。

武蔵は、今も、思い出すことができない。――どう斬ったか、どうあの死地を脱したのか、それもきれぎれにしか、記憶がない。

ただあれから後、眠りについても、ちらついてくるのは――下り松の下で、敵方の名目人であ

る源次郎少年が、
（――怖いっ）
と、一声さけんだのと、松の皮といっしょに斬られて大地へころがった、あのいたいけな可憐な空骸だ。
（仮借はいらぬ、斬れ！）
という信念があったればこそ、武蔵は断じて真っ先に斬ったのであるが――斬ってそしてこうして生きている後の彼自身は、
（なぜ、斬ったか）
と、そぞろに悔い、
（あれまでにしないでも）
と、自分の苛烈な仕方が、自分でさえ憎まれてならない。
われ事において、後悔せず
旅日誌の端に、彼はかつて、自分でこう書いて心の誓いに立てていた。――けれど源次郎少年のことだけは、いくらその時の信念をよび返して心に持ってみても、ほろ苦く、うら悲しく、心が傷んでたまらなかった。剣というものの絶対性が――また修行の道というものの荊棘には、かかることも踏み越えてゆかねばならないのかと思うと、余りにも自分の行く手は蕭条としている。非人道的である。
（いっそ、剣を折ろうか）
とさえ思った。

殊に、この法の山に分け入って幾日、迦陵頻伽の音にも似た中に心耳を澄まし、血しおの酔いから醒め、われとわが身に回ってみると、彼の胸には、菩提を生じないではいられなかった。

手脚の傷の癒える日を待つつれづれに、ふと、観音像を彫りかけてみたのは、源次郎少年の供養のためというよりは、彼自身が自身のたましいに対する慚愧の菩提行であった。

三

「――お小僧」

武蔵はやっと、答える言葉を見つけ出していった。

「じゃあ、源信僧都の作だとか、弘法大師の彫りだとか、この御山にも聖の彫った仏像がたくさんあるが、あれはどういうものだろう」

「そうですね」

稚児僧は首をかしげて、

「そういえば、お坊さんでも、絵をかいたり、彫刻をしたりするんですね」

と、得心したくない顔つきをしながら、頷いてしまう。

「だから、剣者が彫刻をするのは、剣のこころを琢くためだし、仏者が刀を持って彫るのは、やはり無我の境地から、弥陀の心に近づこうとするためにほかならない。――絵を描くのも然り、書を習うんでも然り、各々、仰ぐ月は一つだが、高嶺にのぼる道をいろいろに踏み迷ったり、他の道から行ってみたり、いずれも皆、具相円満の自分を仕上げようとする手段のひとつにすることだよ」

「……」

理に落ちかけると、お小僧はおもしろくなくなったとみえ、小走りに先へ駈けて、草むらの中の一基の石を指さし、

「お客様、ここにある碑は、慈鎮和尚というお方が書いたんですって」

と、案内役の方に移る。

近づいて、苔の中の文字を訓んでみると、

法の水　あさくなりゆく

末の世を

おもへばさむし

比叡の山かぜ

武蔵はじっとその前に立ちつくしていた。偉大な予言者のようにその苔石が見える。信長というおそろしく破壊的でまた建設者があらわれて、この比叡山にも大鉄槌を下したため、それ以後の五山は、政治や特権から放逐され、今では寂として、元の法燈一穂の山に回ろうとしているが、今なお、法師のうちには、戒刀横行の遺風が残っているし、座主の位置をめぐって、相剋の権謀や争い事はやまないと聞いている。

俗生を救うためにある霊山が、人を救うどころか、却って俗生の人に飼われて、からくも布施経済の習慣によって生きているという現在の風を思いあわせると——武蔵は無言の碑の前にあって、無言の予言を聞かないではいられなかった。

「サ、参りましょう」

先をうながして、お小僧が歩みかけると後ろから手をあげて、呼ぶ者があった。
無動寺の仲間僧である。
ふり顧る二人の前へ、その仲間僧は駈けて来て、まず、お小僧に向い、
「オイ清然、おまえは一体、お客様をご案内して、どこへ行くつもりじゃ」
「中堂まで行こうと思って」
「なにしに」
「お客様が、毎日観音様を彫っているでしょう。ところが、巧くほれないと仰っしゃるもんだから、それなら中堂に、むかしの名匠が作ったという観音様があるから、それを見にゆきませんかといって――」
「では、きょうでなくても、いいわけだの」
「さ、それは知らないが」
武蔵へ憚って、あいまいにいうと、武蔵はそれを引き取って仲間僧へ詫びた。
「御川もあろうに、無断でお小僧を伴れまいって悪いことを致したな。元より、きょうとは限らぬこと、どうぞお連れかえりください」
「いいえ、呼びにまいりましたのはこの稚児僧ではなく、あなた様におさしつかえなければ、戻っていただきたいと思いまして」
「なに、拙者に？」
「はい、折角、お出ましになった途中を、なんとも恐れ入りますが」
「誰か、拙者を訪ねて来た者でもあるのでござるか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto